

■りゅうぜん喜之 宗教家。金毘羅託宣を筆録した根本經典「お経様」で、如来教の祖になり、幕末維新期の民衆宗教の先駆した。
りゅうぜんきの
・ ・ ・ ・ ・ 1756＝ 尾張国熱田旗屋町(名古屋市)で、長四郎・みぬの娘に生まれる。幼名とわ、成人してきの。

大岡忠光没・1760＝ 4歳：この年、熱田社西の延命院に金毘羅像安置される。

父は信心深い修験者の人物であったが、
・ ・ ・ ・ ・ 1763＝ 7歳：母が死去。
加賀千代句集1764＝ 8歳：すぐ続いて父、さらに兄、弟も前後して死去。烏森の母方の叔父に預けられ、旗屋の家は売却される。
錦絵始・ ・ ・ 1765＝ 9歳：

久留米藩工事1768＝12歳：同国海東郡蟹江村の庄次郎と結婚するが、夫はまもなく失踪。

田沼意次老中1772＝16歳：

解体新書・ ・ 1774＝18歳：名古屋納屋橋の医師橋本大進家に奉公。
まもなく日置町の名古屋藩士石河主水邦命に請われて仕え、邦命の病氣看病。
・ ・ ・ ・ ・ 1777＝21歳：石河邦命が死去。子の直澄に引続き仕える。

蘭学階梯・ ・ 1783＝27歳：この年、大飢饉。

田沼意次失脚1786＝30歳：

ヲクスマン来日・ 1792＝36歳：
松平定信引退1793＝37歳：

写楽・ ・ ・ 1795＝39歳：直澄の死去で石河家を辞し、旗屋の家を買い戻すと、
夫庄次郎が現れるが。病氣になり、糸繕りと一文菓子屋で生計をたてるも、看病のため借金がかさむ。
やがて庄次郎は死去。人の口利きで、小金を持つという尾頭橋の_法華行老覚善とその子倉吉を家に迎えるが、覚善は横暴な寄食の徒で、生活を支えることもできなくなる。

宣長没・ ・ ・ 1801＝45歳：
膝栗毛始・ ・ 1802＝46歳：*雪隠で神憑り、名月の豆を採り再び神憑り。覚善に打明け、暴行されるも、金毘羅大権現が憑依したと審される。集まった信老の家を借りて「今釈迦出生」を託宣し、その儀礼行う。

いづノ来航・ 1804＝48歳：*覚善に「今釈迦」の証拠の石をやると予言し、熱田神宮で小石発見。覚善は小石を粗末に扱うが、熱田神宮で大切にせよとの託宣。さらに、利七の紹介で緒川村の碩道を訪ね、碩道は天竺の靈山の石と説明。再び、金毘羅が下り、その託宣で、覚善は“お手次”となり、子は利七の養子となる。病氣が全快して尊さを感じた彦左衛門が、これまでの次第を聞き、書き記す。病人1万人以上を治療、神の証拠と位置づけられる。

青洲麻酔手術1805＝49歳：初めて和泉屋へ出かけ説教。これ以後、信者の家を借りてしばしば説教が行われるようになる。
いづノ報復・ 1806＝50歳：「今釈迦出生」の説教。
いづノ船狼藉・ 1807＝51歳：それまで狷介で攻撃的だった金毘羅の言葉遣いが、以後穏やかになって行くも、なお覚善と確執。
間宮海峡発見1808＝52歳：知多郡緒川の利七の家を訪問、しばらく滞在。この後九ヶ月説教を休み、
・ ・ ・ ・ ・ 1810＝54歳：
ゴロブシ拿捕 1811＝55歳：この年、説教は2回のみ。
高田屋拿捕・ 1812＝56歳：説教の回数が急激に増加。_信者には藩士も多く、この中から{御綴り連中}が発足、説教が筆録され、今に残る根本教典「お経様」に成って行く。信者からは一尊・慈尊・神様などと呼ばれたが、
浮世床・ ・ ・ 1813＝57歳：町代より説法差留の達し。*自らはりゅうぜん(女+留・女+全)と名のり、この年から金毘羅神格上昇。
黒住教・ ・ ・ 1814＝58歳：役所へ出頭を勧める福満寺の住職に、「書付」を渡す。藩士太田半右衛門の子の病氣を引受けるも、死去したため、立腹。入海大明神が下り、金毘羅の真意を伝える。二度目のお口開き説教で、金毘羅が下り和解。
・ ・ ・ ・ ・ 1815＝59歳：誕生日を祝う。_如来の受肉を語り神格化、{十三回忌}の儀礼を通じて再生を自覚、如来教として定着。
伊能測量終・ 1816＝60歳：江戸金毘羅講中、象頭山の帰りに参詣。
杉田玄白没・ 1817＝61歳：江戸金毘羅社神主の金木市正が入信。江戸の衆が、権力を刺激するのを恐れ、説教を自粛するよう進言。
水野忠成老中1818＝62歳：日蓮五百五十年忌に、小松原法難について説教。
群書類従完結1819＝63歳：地震について3回説教、終末観深化、宇宙像構想。
・ ・ ・ ・ ・ 1820＝64歳：_武家の講で“天下”といえども如来や神の化身ではないと述べ、寺社奉行の取調べを受けた覚善は緒川村倉吉方へ退去。自らも、御器所新川七本松隠居所へ隠居。以後、説教は御本元のみで行われる。金木市正が喜之の教えを合法化するため吉田・白川両神道家に入門するよう勧めるが従わず、
伊能図完成・ 1821＝65歳：江戸の信者が流行神的に増加、金木はお礼参りに喜之のもとへ。
英船浦賀来航1822＝66歳：金木が来訪して江戸の講の繁盛と弾圧の心配を伝え、一時滞留。頼まれて、金毘羅の像を江戸に贈る。
いづノ鳴滝塾1824＝68歳：以後、_(神愚りしない状態の話)「文政年間おはなし」、(代筆による江戸の信者の指導)「文政年中御手紙」。
・ ・ ・ ・ ・ 1826＝70歳：体調不良となり、一旦回復するも、高熱、浮腫に苦しみながら、_没した。